

1 事業名 青少年体験活動フォーラム in さんべ

2 必要性

「新・機構元気プラン」(平成 26 年 6 月)の「第 2 期教育振興基本計画」(平成 25 年 6 月 14 日)では四つの基本的方向性を掲げている。その第一番目が「社会を生き抜く力」の養成である。そのためには、学校内外の多様な環境からの学びが重要とされている。機構においては、これらを踏まえ、各種の体験活動を通じて、青少年に「社会を生き抜く力」の養成を図ることを新たな目標として、「機構が重点的に取り組むべき課題と具体的方策～青少年の『社会を生き抜く力』の育成を目指して～」を策定した。

本事業は、その「新・機構元気プラン」に基づき、中国ブロックの青少年教育施設職員・施設ボランティア、教育関係者、青少年教育団体、NPO 法人等の民間事業者、青少年等が一堂に会し、青少年の社会を生き抜く力の育成を図るための実践的な講演や研究協議、情報交換、ネットワークの構築を行うことをめざしており、国立青少年教育振興機構が継続的に取り組むべき事業である。

3 趣 旨

青少年の体験活動の普及を図るため、その関係者が一堂に会し、青少年の体験活動の推進に取り組み、青少年の社会を生き抜く力の育成を図るための実践的な研究協議や情報交換を行う機会を提供する。また、ボランティアが相互の交流を深め、情報を共有することで、ボランティアの資質の向上を図る。

4 共 催

国立江田島青少年交流の家・国立吉備青少年自然の家・国立山口徳地青少年自然の家

5 期 日

平成 26 年 11 月 29 日(土)～30 日(日)＜1泊 2 日＞

6 参加者

- (1) 募集対象・人数 青少年教育施設職員・施設のボランティア、学校教育・社会教育関係者、学校教育行政関係者、公民館職員、青少年教育・団体関係者、民間事業者(NPO 法人、自然学校等)、青少年教育や青少年の体験活動に興味・関心のある青少年 100 名
- (2) 参加人数 79 名
- (3) 参加者分析 参加人数 79 名中、一般 23 名、学生(施設等のボランティアを含む) 56 名の参加があった。一般参加者の内訳は、青少年教育施設関係者 12 名、学校教育・社会関係者 6 名、公民館職員 3 名、青少年教育・団体関係者(民間事業者を含む) 2 名であり、いずれも青少年教育に深く携わる方の参加であった。学生の参加が 56 名と多く、「内容に興味があって」や「自己啓発のために」、「交流を広げたい」などボランティア活動に高い意欲と関心を持っていることが伺えた。ほとんどが大学生であったが、高校生も 2 名の参加があった。



また、中国ブロック国立4施設に加え、国立室戸青少年自然の家、国立曽爾青少年自然の家からの参加があった。

(4) 参加者地域 島根県 32 名, 広島県 14 名, 山口県 11 名, 岡山県 6 名, 高知県 3 名, 鳥取県 1 名, 奈良県 12 名

7 参加経費

実費のみ <一般>3,780 円 <学生ボランティア>2,780 円

8 講 師

○基調講演

「青少年の社会を生き抜く力の育成 ―体験が人生の生き方を決める―」

講師 千葉敬愛短期大学 学長 明石 要一 氏

○事例発表

「ボランティアが参画した教育事業のあり方」

国立江田島青少年交流の家 企画指導専門職 福江 大幸 氏

「小学校長期宿泊体験学習について」

国立吉備青少年自然の家 企画指導専門職 村上 聖一 氏

「社会的養護を要する子どもやそれに関わる大人に対応した取組」

国立山口徳地青少年自然の家 企画指導専門職 宮本 慎也 氏

「3.11 から学んだこと ―災害ボランティアを経験して―」

国立三瓶青少年交流の家 法人ボランティア 十川ちひろ 氏

○分科会

第1分科会 講話とワークショップ「災害時における施設・学校等の危機管理能力」

講師 山口県萩市立むつみ中学校教諭 森田 憲明 氏

(元山口県十種ヶ峰青少年自然の家指導主事)

第2分科会 ワークショップと実践活動「災害時におけるボランティアの役割とボランティア活動の実際」

講師 日本赤十字社防災ボランティアリーダー 福田 悟 氏

9 事業内容

(1) 事業の特色

本事業は、平成26年6月に策定された「新・機構元気プラン」に基づくものであり、『青少年教育』『防災』『ボランティア』をキーワードに、青少年の社会を生き抜く力の育成を図るための学びの場を青少年教育関係者及び青少年の教育や青少年の体験活動に興味・関心のある青少年に提供する。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

「新・機構元気プラン」の中でも述べられている『青少年の社会を生き抜く力の育成』や『青少年の現状と課題』、『青少年のボランティア活動の推進』を踏まえ、座学形式で理論的に学ぶ場面と実際に体験して学ぶ場面を設定し、理論と実践の両面から本趣旨に迫ろうと考えた。



基調講演

具体的には、1 日目は基調講演や中国ブロックの国立 4 施設からの事例発表を通して、体験活動の重要性や事業の有用性、青少年の直面する課題などを考えられるようにした。事例発表の内容においては、「新・機構元気プラン」の 3. 具体的方策に挙げられている項目に視点をあて、中国ブロック 3 国立青少年教育施設に発表を依頼した。国立江田島青少年交流の家は、3. (2)②アについて、国立吉備青少年自然の家は、3. (1)③について国立山口徳地青少年自然の家は、3. (1)②アについての発表であった。また、学生ボランティアも多く参加していることもあり、当施設からは、3. (1)②に視点をあて、2 日目の分科会にもつなげる意味でも災害ボランティアに参加した経験のある当施設法人ボランティアの発表を設定した。



事例発表（質疑応答）

夜には情報交換会の時間を設定し、講演や事例発表、青少年の体験活動等について参加者同士、質疑応答や意見交換ができるようにした。また、時間をずらし、当施設の法人ボランティアが企画・運営を行うボランティア交流会の時間も設定した。この交流会では、参加した国立 5 施設のボランティアが活動紹介をしたり、グループを編成しテーマを決めてワークショップ形式でボランティア同士想いの共有を図ったりできる場とした。



ボランティア交流会（活動紹介・アイスブレイク・ワークショップ）

2 日目は、近年身近に起きている災害に目を向け、『防災』の視点から、2 つの分科会を設定した。第 1 分科会は主に一般の方を対象に、「災害時における施設・学校等の危機管理能力」と題し、実際に青少年教育施設在勤中に災害に遭われ、その対応を行った方を講師に招き、講話とワークショップ形式で、防災について考えたり意見交換したりする場を設定した。第 2 分科会は主に学生ボランティアを対象に、東日本大震災時にも活動された防災ボランティアリーダーの方を講師に招き、「災害時におけるボランティアの役割とボランティア活動の実際」と題して、ワークショップと実践活動を通して、防災について考えたり意見交換をしたりする場を設定した。



第 1 分科会（講話、ワークショップ）



第2分科会（講話、ワークショップ、実践活動）

（3）広報のポイント

県内は、県・市教育委員会、小中学校、公民館・コミュニティセンター（鳥取県も含む）、NPO法人（鳥取県も含む）、大学を中心に直接チラシを送付し広報した。また、中国地区の青少年教育施設にチラシを送付するとともに、近隣団体や関係する団体に広報を依頼した。岡山県、広島県、山口県については、共催の国立青少年教育施設にチラシを送付するとともに関係する団体に広報を依頼した。さらに当施設 HP にも掲載し、参加を呼び掛けた。

（4）日程表

		7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
11月29日（土） ＜1日目＞							受付 （昼食）	開 会 式	基調講演	事例発表		入 浴 連 絡 休 憩		情報交換会		入浴・休憩	就 寝 準 備	就 寝
						※1日目昼食は希望者												
11月30日（日） ＜2日目＞	起 床	朝 の つ ど い	清 掃 ・ 朝 食	休 憩	身 辺 整 理	第1分科会	昼 食 ・ 休 憩	閉 会 式	退 所	（施設見学等）				ボランティア交流会 ・活動紹介 ・情報交換 等				
						第2分科会												

（5）運営のポイント

開会式・開会式、基調講演・事例発表、情報交換会、ボランティア交流会、第1分科会、第2分科会については、企画指導専門職で分担し、運営を担当した。特にボランティア交流会、第1分科会、第2分科会については、事前に担当者が代表者・講師と打ち合せや会場確認等を行い、スムーズな運営が行えるようにした。当日までの諸準備や会場準備は、全職員で共通理解を図りながら進めた。

（6）安全管理のポイント

参加者には当日までに、研修の詳細、施設の状況・生活、交通手段等についての情報提供を行った。また当日もオリエンテーションで研修の詳細や施設について説明したり、必要に応じてアナウンスしたりすることで、安心して研修に参加できるよう配慮した。また、必要に応じて講師や各担当者が安全に活動するためのポイント等の指導を行うようにした。

（7）アンケートの満足度・主な記述

- ・アンケートによる満足度は、「満足」と「やや満足」を合わせて100%であった。
- ・自由記述は以下のとおりである。

＜基調講演＞
基調講演の内容はもちろんですが、人に話を聞かせるということがどのようなことかということを勉強になりました。
基調講演では、体験が人の成長の中でどれだけ大切かということについて、具体的な例をもとにわかりやすくお話いただいた。
＜事例発表＞
事例発表では、各施設の貴重な取り組みを知ることができ、自分の施設でも参考になる内容であった。
新「機構元気プラン」を進めていく上でも、参考になる発表であった。自分の施設でも取り組んでいきたい。

<ボランティア交流会>

ボランティア交流会はとても素敵な企画で、ボランティア同士の交流ができてとても楽しかったです。2日間とても楽しく学びのある時間でした。いろいろな施設のボランティアの方と交流することができ、とても参考になりました。場所は違っても同じような思いを持っていることが分かり、これからがんばってこういう気持ちになりました。

<第1分科会>

2日目のリスクマネジメントの分科会では、実体験に基づく内容でとても説得力があり、ストンと落ちました。あとはどれだけ実地していけるかですが…。実のある研修でした。

施設の危機管理能力のグループワークがとても有意義でした。自分の施設でもしもの事が起きた際の対応 準備物についてふりかえるよい機会でした。

危機管理において、見方をかえる」複数の視点で見る」などものごとを捉えることの大切さ、難しさがよく分かった。危機管理において、最低限のマニュアルは必要だが、やはり、防災訓練をいかに効果的に実施するかを考えるべきだと思った。

この研修を受けて、自分がどれだけ災害に対して対岸の火事と見ていたかよく分かりました。施設の職員として、どう行動するか、多人数になった時、孤立した場合などさらに苦境に立たされた場合の対応を知ることができ、自分の視野の狭さを感じながらも、新しい発見ができたように思えました。

他の施設の方と共同で、どう行動するかを話し合ったことで、視点の違いも分かり、それが自分の考えていなかったものであると、考える・どう行動するだけでなく、なぜそう考えたかを聞けることで、自分自身ができることは何か考える幅が広がり、とてもプラスになりました。

<第2分科会>

第2分科会のワークショップは、あっという間に時間が過ぎてしまい、名残惜しかったです。身に付けたスキルをボランティアとしてそして営業活動に活かしていきたいです。

実際に災害ボランティアに行ったことがあります。その際、特に自分の携行品について深く考えていなかったが、自分がお世話になってはいけない「自己完結」などボランティアの基本として大切なことを学びました。

今回災害の話聞いて、ボランティアとして自分が何ができるか考えるきっかけになった。災害はいつ起こるか分からないので、今回のように、考える機会が必要であると思った。また、一人で考えるより、みんなで考えた方が、一人では気づけなかった考えもできるので、いいと思った。

災害ボランティアは行ったことはないし、無理かなと思いますが、自分の居場所からできることを考えてみたいと思いました。いろいろな施設でいろいろな活動が行われていることを知りました。地域でのボランティア活動がもっと増えて、いろいろな人と関わっていききたいので、いろいろな形で研修や講座が活用できるいいなと思いました。

<全体>

多くの施設の方と交流をすることができ、ネットワークを広くできたことが、自分にとっても大きかったです。

初めて参加しましたが、いろいろな施設のボランティアのみなさんと出会い、想いを交わすことができ、モチベーションが上がりました。

10 成果と今後の課題

<成果>

- 参加者アンケートの結果によると、満足度は「満足」と「やや満足」を合わせて100%と高い評価を得た。このフォーラムが参加者にとって有意義な事業となったといえる。
- 事例発表は、今後いろいろな施設で「新・機構元気プラン」に取り組んでいく上でも、また、青少年教育関係者が青少年教育を進めたり、防災について考えたりしていく上でも非常に参考となる内容となった。
- 基調講演の内容においては、具体的な事例を織り交ぜての大変興味深い話から、体験活動の意義の再確認やその有用性を確認できた有効な機会となった。「基調講演は、体験が人の成長の中でどれだけ大切かということについて、具体的な事例をもとに分かりやすくお話しいただいた。」という感想にも繋がり、今後体験活動が推進されることへの期待がもてる講演となった。
- 第1分科会においては、災害時における施設・学校等の危機管理能力について、講話とワークショップ形式で行った。実体験を基にした内容は、アンケートの自由記述にもあるように、リアリティーがあり、これからの自施設・学校の危機管理体制を考えていく上でとても貴重な時間となった。
- 第2分科会においては、災害時におけるボランティアの役割とボランティア活動の実践をワークショップ形式と実践活動を行った。参加した学生ボランティアたちは、「自分がお世話になってはいけない」「自己完結」など災害ボランティアの基本として大切なことを学び、これからのボランティア活動にも大いに役立つ内容となった。活発なディスカッションが行われ、交流も深まった。

○ボランティア（学生）の参加が 56 名と多く、「内容に興味があつて」や「自己啓発のために」、「交流を広げたい」などボランティア活動に高い意欲と関心を持っていることが伺えた。ボランティア交流会においては、当施設の学生法人ボランティアが、事前から企画を検討し、運営を行った。各施設のボランティアの趣向を凝らした活動紹介や小グループに分かれての意見交換など、ボランティア同士がボランティア活動に対する思いや考えをお互いに共有したり、新たな刺激や発見、今後の活動に向けての活力を見出したりすることができた。また、ネットワークも構築することができ、非常に有意義な交流会となった。

<今後の課題>

○基調講演や事例発表、分科会の中で、質疑応答の時間を十分に設定することが難しかった。遠方からの参加も考慮する必要があるが、1泊2日の開催であれば、開会・閉会や各プログラムの時間設定の仕方、また、企画段階でのプログラム内容の精選・見直しなどをしっかりと考えていく必要がある。

○学校関係者や公民館関係者の参加が少なかった。今後、青少年の体験活動に関する研修会を考えていくのであれば、資料の配布のみにとどまらず、特に近隣には早くから直接広報に出かけるなど、趣旨をしっかりと理解してもらい、参加してもらえような広報の仕方を考えていく必要がある。

○前年度より期日はすでに決まっていたが、今年度企画するにあたり、国立・県立の青少年教育施設で事業が重なっているところが多くあり、参加者も予定より減となった。早くから期日だけでもアナウンスしておいたり、各施設の事業等を確認したりするなどの調整が必要だった。

11 普及計画・普及実績

成果については HP 上に掲載するとともに、関係諸機関に紹介していく。また、今回のような青少年教育に関する事業を企画する際には、参加者に案内し、ブラッシュアップする機会を提供する。

12 その他

中国ブロック 4 国立青少年教育施設持ち回りのフォーラムとしての趣旨は今年度までだが、充実した研修であったことやボランティア同士の交流の深まりを考えると、今回のフォーラムのように関係者が一堂に会し、情報を共有したり、意見交換をしたりする機会が必要であると感じる。何らかの形で継続していけるような機会を考えていきたい。また、地域や学校に様々な情報提供及び啓発活動をしていくのも国立青少年教育施設の大切な役割である。こういった事業を通して、これからも国立施設としての役割を果たしていきたい。

（担当 企画指導専門職 濱野 健一）